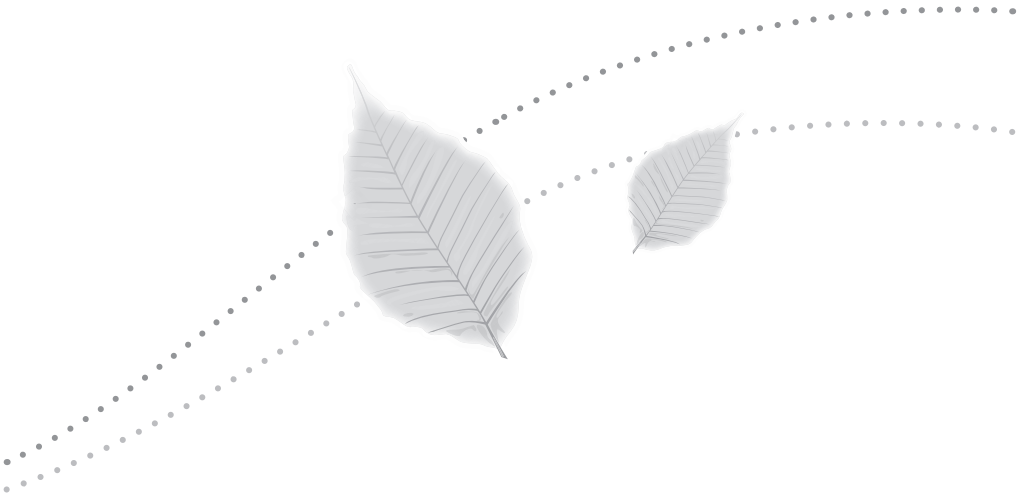
巻頭エッセイ

つなぎたい　ことば

こやま　峰子



人と人は、ことばで心を通わせることができる。けれど重宝し使っていたカップやソーサーを不注意にも手をすべらし壊してしまったとき、共通のことばがないことに気づき、戸惑う。

「ゴメンナサイ。ナガイアイダ、ゴクロウサマ。ソシテ、アリガトウ」と一人、届かないかも知れないことばを呟く。かけらを拾いながら、彼等からのことばを、ひたすら待つ。互いに異次元に暮らすもの？　同志の交信はポエティックな精神が頼みの綱。

この地球にはバッタ、モグラ、蜜蜂、小鳥など多くの生物が生きているが意思疎通は難しい。難しいけれど不可能ではない。つなぎたい思いが不可能を可能に変える。そして、つなぎたい願望と想像力が詩や童話を初め多種の作品を生み、文化を形作ってきた気がする。文学の始まりは、つないでみたい心から出発した気がする。それぞれの伝えたい対象によって民話、寓話、物語、小説などのジャンルに枝分かれしていったのでしょう。

フランスの哲学者アラン（本名はエミール・オーギュスト・カルティエ、一八六八～一九五一）は人間にとって「大切なものは童心や若さであり詩である。これを忘れた人はみすぼらしい。悲しいかな、そのまま老いてしまうほかはない」と語っている。「薬用植物を研究するにしても、同時に木をとりまく妖精たちの見えない姿を追う一瞬のきらめきをもつべき」と『信仰について』のなかで述べている。

こやま　みねこ　詩画集『地雷のあしあと』（小学館）は出版され５年経過したが現在もボスニア・ヘルツェゴビナの子どもたちが描いた絵が全国巡回中。11月は北海道芸術高校，2009年１月『地雷のあしあと』合唱コンサート，４月も音楽会を開催。

おしつけがましくなく、詩的なことばで子どもや大人に作品を届けられたら、ことばは、つなぎたい相手の心の湖で小魚のように、ぴちぴちと息づき、作者の思想は普遍性をもち泳ぎだすにちがいありません。作者の想いを背負った登場人物や動物などが物語のなかで健気に動きまわる姿に読者は明日の光を見いだし、勇気づけられ、新しい一歩を踏みだすこともあるでしょう。

私は思う。頼りなげであっても、宇宙に小石を投げるようにみえない相手に夢を投げかけて見たい衝動にかられるときがある。そのようなときに生れた作品は冒険的すぎて誰からも振り向かれないであろう故、編集者にみせる勇気はもちあわせていない。心のむくままの創作の話はさておき、時代の風にも耐え抜き人の心に根をおろし育っていく作品には詩情と同時に厳然たる真実も必要な気がする。

サン＝テグジュペリの作品に多くの読者が魅せられる大きな理由は事実を事実として前面に押しだすのではなく文学的オブラートに包みつつ伝えていく思想が核としてあるのではないでしょうか。世界中の読者をさりげなく説得していく魅力……魔力のまえでは頭を下げるのみ。

『星の王子さま』はサン＝テグジュペリがアメリカ、ニュヨークに亡命中に執筆された。ある日、レストランの紙ナフキンに描いた落書きを出版社のレイナル＆ヒッチコック社社長がみて、子ども向けのクリスマス作品として創作を依頼し、一九四三年に出版される。フランスではサン＝テグジュペリが消息をたち、第二次世界大戦が終結した次の年、刊行された。その後は世界百四十以上の言語に翻訳され累計二千万部以上の売り上げに伸びていく。『聖書』、マルクスの『資本論』につぐ世界的なベストセラー。

飛行家サン＝テグジュペリは第二次世界大戦の末期、一九四四年七月三十一日、偵察飛行に出撃したまま、行方不明になってしまう。最後の飛行場はナポレオンの生れた地中海に浮ぶコルシカ島のバスディアにある。ジェノバ統治時代の面影が残る町の飛行場を訪れたのは一九九七年の秋。日本からニースに向かい、そこで小型機に乗換え、バスディアの飛行場に降りた。飛行場に立ったとき、潮風が鼻の奥をツーンと刺したことは今も忘れられない。サン＝テグジュペリは、この飛行場を最後に何処かに消えてしまった！　というおもいが旅人の気持ちを感傷的にしたことは記憶に鮮やかに残っている。あのとき潮風が、耳元でささやく。「大切なことは目に見えないんだよ……心でさがさないとね」

アランもサン＝テグジュペリも心に重きをおいている。現代のように寒々しい事件ばかりが起きているときこそ、このような作品が多くの人々に読まれることは期を得ているのかもしれない。救いの書として。